

高柳専務取締役が語る

千一夜



△テレビ開発の動機は漫画▽

久里 テレビといえば、子どものころ見た漫画に、昭和七年ごろですが、テレビとはいわずに、「映る箱」とかいつて、映像が一枚の板に映っている漫画を見たことがあります。

高柳 私もテレビの研究をはじめて思いついたのは、漫画……当時はポンチ絵といっていました……を見てからですよ。あれは大正十二年で



漫画家 久里洋二さん

したね。この漫画は箱の上に顔ぶちが書いてあって、その中で女の子が歌を歌っている。将来テレビというものができる、こういうものになるというわけですね。これはおもしろいと思って、それでテレビの研究をはじめたというわけですよ。浜松式というのがあり

ましたが、あれが先生の……

高柳 ええ……受像機をどうし

うかと考えた時、真空の中で電子を走らせて、ふりまわし、それで画を出すことを考えた。それには、ブラウン管を改良するのが最適だと思って、私をはじめ使ってみただけです。当時ブラウン管は物理の測定器だったのですが。

久里 ブラウン管の中で、電子が走行して画になるのですか。

アニメーション(動画)作家としておなじみの久里

洋二さんと、テレビの父として世界的権威である高柳健次郎専務が、カラーテレビについて、おもしろい話をしています。カラーテレビ時代に備えて、ぜひ一読してください。カラーテレビについての話題が豊富になり、販売のときにきつとお役にたつでしょう。

△カラーはなぜうつる▽

高柳 真空管のガラス面に蛍光体がぬってありましてね。この面に電子を走らせ、つきあて、たたくと、そこが蛍光を発するわけです。そして電子が走っている途中で、磁石なり静電気をかけますと、自由自在に向きを変えることができる。こういう信号を発生し、電極にかけると画が出るというわけです。大変な苦勞をしましたがね……。

高柳 昔は蛍光体が緑色だったのですが、昭和九・十年ごろに白色に改良しましてね。さらに白黒は人間でいえば、色盲ということになりましてからそのことから、カラーにしたいなと考えてきました。

久里 カラーテレビなんて信じられなかったですがネー。

高柳 ええ、私もでもは将来カラー時代は必ずくるのだから、戦後白黒放送の標準方式をきめるとき、カラーに進むのに最もふさわしい形で白黒をきめようというわけで、随分苦勞しました。

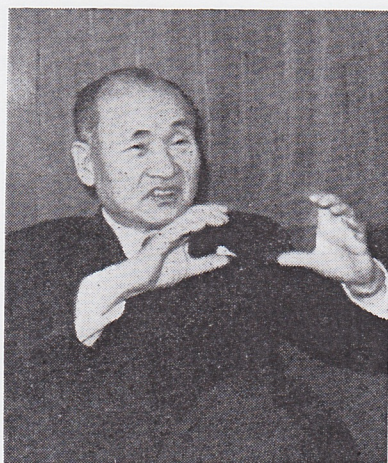
久里 どうしてカラーで映るのか不思議でしやうがないですね。白黒よりも電波の波調が長いのですか。

高柳 いや、電波は同じです。

カラーテレビ

● とき 41・4・8

● ところ ビクターセールス・センター



高柳健次郎専務取締役

久里 私がやっておりますNHKの「ひょっこりひょうたん島」のアニメーションも、最近ではカラーでやっております。この場合、色を沢山使わないで、テレビに合わせ、三原色と黒しか使わない。そうするとすごくきれいに出来ますね。

高柳 昔は三原色以外の色は出が悪くて、評判が悪かったのですが、最近では受像機自体の改良と、放送技術の進歩があいまって、中間色が実に美しく出るようになりました。よく外国人が日本のカラーを見て、色が美しいので驚いています。先般も、NHKの「歌のグランプリ」をヨーロッパに送ったところ、むこうの人は色の美しさにびっくりしたそうです。先生もこれからは、三原色だけではなくて、中間色を使ったアニメーションをお作りになられて大丈夫ですよ（笑）

久里 そうすると、三原色が船のスクリーンのようなものに当って、それでカラーになるわけですか。

高柳 そういう方式もあります。ビクターの医療用工業テレビなどはそうですね。しかし、現在放送されているカラーテレビは、赤絵、緑絵、青絵が同時に出るようになっていきます。すなわち、カメラが三つあって、各々のカメラが別々にとったものを、同時に放送するわけです。この三つを一緒にするのが大変むずかかったわけです。最近では、この技術がよくなったので、よくうつるようになりました。

△最近のカラーはすばらしい▽



ポンチ絵がテレビ開発の動機に

久里 中間色が使えらと、大助かりですね。こうして、カラーが一般化してきますと生活環境にも影響して、部屋のじゅうたんの色、壁の色、テーブルの色などに神経を使うようになり、生活自体がカラーフルになってきますね。

高柳 そうですね。CMなども全部カラーになるでしょう。現にアメリカでは、CMは白黒でなければ安心できない、口紅などはカラーにすると、色が違ってしまふといわれていたのが、最近ではカラーの画の質が良くなりましたので、逆にカラーでなければ、アピールしないそうですよ。

久里 色の調整は、素人でもできますか。

高柳 ええ、白黒と同じように、子どもでも調整できますよ。昔は調整が面倒だったので、このイメージがあるかもしれません、最近のセッとは、この点の心配は全くありません。

久里 カラーは白黒よりも目が疲れないような気がします。また、カラー受像機で白黒を見ると、普通の白黒受像機よりも、画がおちついて美しくうつるように思うのですが。

高柳 確かにそうです。なぜかといいますが、白黒のブラウン管は、明るいところはより明るく、暗いところはより暗くという働らきがありますから、ちよつとした顔のシワでも、誇張されてしまうわけです。ところがカラーセッとは、明るいところと暗いところが正比例されますので、画がおとなしく、見たままの状態でうつるわけです。いわば、白黒は写真でいえば、硬い焼付け、カラーはソフトな焼付けというわけです。

へこんなテレビができたら

久里 私はこんなテレビを空想しているんですよ。テレビが新聞と同じように、薄っぺらの紙のようになって、駅などの売店で売っている。それには何も書いてなくてね、ボー

ダブルの電池のスイッチを入れるとそこに画が映る。見終ると新聞と同じように、まるめてポイと捨ててもよい。完全なる消耗品としてのテレビですね。

高柳 なるほど、おもしろいアイデアですね。私もね、将来はブラウン管の厚みをずつと薄くして、額ブチのようにして、どこへでもかけられるようなものになりたいと思っていますがね。

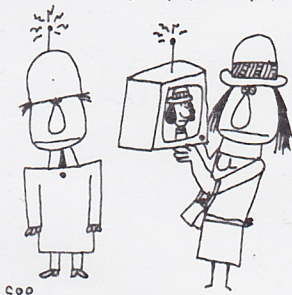
久里 それからね。人間の考えていることが映像にならないかと思うんですが……。例えば、テレビパシーを映像にできれば面白いですよ。会議などのときに、他人の考えがみんな映るので、ゴマかしがきかない。

高柳 そうなると、かえって具合が悪いケースも出てきますよ(笑) この機械をもっている人にあつてはかなわない。みんなわかっています。ずいぶん値段も高いものになるでしょうな(笑)。

久里 スイスの家庭を訪問したとき、ブラウン管だけがとび出していて、自由に動かせるのを見ましたが大変便利だと思いました。これならば、すぐにでも実用に……。

高柳 ええ、それならば先般ウチで開催しました「ミュージック・シ

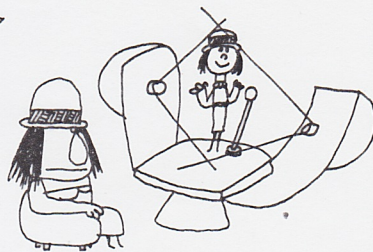
テレパシーTV



TV新聞



立体TV



夢のテレビ……こんなTVができるだろう

ヨー」のとき、同じようなものを出品しました。ムキがどちらへでも変えられて、便利ですね。

それにね。頭のどこかに電気をかけると、頭の中に画を連想させるようなテレビジョンができれば、おもしろいでしょ(笑)。

久里 ブラウン管のないテレビですね(笑)。立体的に見えるテレビはできませんか。

高柳 いや、これが今アメリカで開発されつつありましてね。ホログラムテレビというんです。光を霧のようなスクリーンに当てて、それが乱反射して立体的に見える。これが進んでくれば、おもしろいですよ。

久里 光は引力によって、少し曲るそうですが、これがウンと曲げられれば、サンフランシスコやニューヨークが見られるようになりますがどうでしょう(笑)。

高柳 いや、これはむりですな。光は曲るといっても、重力によってほんの僅か……一度の零点何万分の一ぐらいしか曲らないのですね。

へ漫画も科学的に……

久里 最近の漫画は宇宙を表わしたものが多くとか……。高柳 ええ、最近の子どもは光と

か星なんか非常に興味をもってきますね。だから、漫画も宇宙的、科学的になってきます。例えば、空とぶ円盤が着陸するとき、昔ならシュル・シュルと降りればよかったけど、最近では忽然と表われて、パッと消えなければ納得しない。というのは、円盤は光と同じ速さで飛んでいるのだから、降りるところが見えるはずがないというわけです(笑)。それに、色に対して非常に敏感ですね。

△いろのはなし▽

高柳 人間は本質的には、色に対して敏感なものだといわれますね。

久里 ボクの漫画には、とてもきれいな色を使っています。それは、ボク自身が色に対して懂れているという点もありますがね。最近では、屋根の色、電車の色など、とてもきれいになりました。やはり、色というものが、生活の中に入りこんできているからでしょうね。

高柳 今までは色に無関心すぎましたね。黒系統の色が多すぎた。

久里 そうですね。ただし、赤だけは特別です。黒と赤が中心ですが赤の使い方がまだ下手です。ボクが絵をかくときは、はじめグリーン、ブルー系統の色を使っていた、最

後に赤をもつてきて、ひきしめるわけです。

でも、これからカラーテレビが普及してくると、ますます生活の中に色というものが有効にとり入れられるでしょうね。そして、子どもだけではなく、大人も色に対して、敏感になってくるでしょう。

高柳 カラーテレビの色は、できるだけどぎつい色は避けて、やわらかい中間色を美しく使ってゆきたいと考えています。

久里 ボクの漫画は、外国などにも出しているのですが、やはり色の好みにも国民性がありまして、どぎつい色を好む国とそうでない国があります。日本人はどちらかというとどぎつい色は嫌いますね。だから、カラーテレビの場合も、中間色の美しい色が、最も好まれると思います

△これからの

カラーの進む道▽

高柳 これからのカラーテレビは



カラーテレビ時代

ますます性能がよくなつてきて、人間の顔のちよつとした表情が、色でもって読みとれるようになりますよ。
久里 そうなると、お酒なんか飲んでテレビに出ると、すぐバレちゃう(笑)。それから値段はもっと安くならないのですか。

高柳 値段はそう安くはならないでしょうね。アメリカでも、カラーが出はじめたころは、もっと安くなくてから買おうという人が多かったけれど、そんなに安くならなかった。それは、カラーには白黒セットの部品が多く使われているので、コストダウンする余地がありませんからです。

久里 今の家庭は、白黒テレビ、ステレオ、車、ピアノが揃ってき

た。今度はカラーテレビが欲しくなる番です。カラーが入れば、家庭がとて楽しくなるでしょう。会社の帰りにバーなどにひっかかっていた旦那様も早く帰るようになるし(笑)。
高柳 カラーテレビ講習会で地方を廻ったとき、地方の人たちのカラーに対する関心は非常に高かった。カラーは期待されていますね。

久里 漫画家としても、大いに期待しています。あと五年もすればカラーを買わないのは色盲の人ぐらいになりますね。

高柳 色盲の人のためには、補強装置を作つてあげますよ(笑)。

久里 ボクも欲しくなってきましたよ(笑)。